



「校歌とは・・・」

秋の訪れとともに、インフルエンザが流行しています。本校も先月末は感染拡大防止のために、半数の学級で閉鎖をしなければならない緊急事態でした。ようやく今週になって罹患者も減り、平常の教育活動を再開することができました。

さて、山陽中は生徒数が千名を超える大規模校ですので、他の中学校のように全校生が体育館に入って実施している行事を開催することはできません。残念ながら、始業式も終業式もリモートによる各学級でのテレビ放送となります。そのため、「アクリエひめじ」の施設を借りて実施する学芸発表会は、全校生が一堂に会して行われる、唯一の屋内学校行事です。生徒の皆さんが、9日に開催される学芸発表会に元気に参加できるよう、願うばかりです。

その学芸発表会では、限られた環境と時間の中で練習してきた学級での合唱やそれぞれの発表に期待しています。特に全校生で歌う校歌を聞くのを楽しみにしています。体育大会での力強い歌声とは違った、大ホールに響く美しい山陽中校歌を聞きたいものです。

チューリップのボーカルである財津和夫さんが、校歌について、次のような思いを日本教育新聞(2023年9月25日第6387号)に寄せています。

私は校歌が体の一部のような存在だと考えています。大げさかもしれませんが、宝物のように大切にしたいと思っています。

地元・福岡県にある短大の校歌を作詞作曲したことがあります。自分の子ども時代を振り返りながら作りました。それらを抽象化しながら、歌い手に想像する余地を残すことで、より多くの人に共感してもらえるような歌になるよう、心掛けました。

他の歌と違い、校歌にはとても珍しい特徴があります。それは個人の好みや流行にかかわらず、「その学校に通っている」という理由で歌うことになるということです。校歌というのは、同じ時間や空間を共有した証になります。

子どもの頃は、歌詞の意味もよく理解できずに、大人の言われるままに歌っていた人もいかもしれません。しかし、何度も歌ううちに、歌詞とメロディーが一体となって体の中に入り込んでいきます。そういった意味で、校歌は体の一部になっていると思っていますのです。

歌は思い出と結びつく力を持っています。友達や勉強、中には叱られたことなども、学校生活の記憶として強くつながります。

そして、卒業式で歌う時には、「友達と別れるのだな」とか「この学校には、もう来ないのだな」とか、感慨深く、しみじみとしたものになり、校歌はその人にとって格別に大切な歌になるのです。

在学中はもちろん、卒業後も、校歌はとても恋しく、かけがえのないものであり続けます。読者の中にも今でも歌える人は多いのではないのでしょうか。大人になってから改めて歌詞を読み直してみると、その意味を理解でき、新たな発見があるかもしれません。

中には統廃合で校舎と一緒に校歌がなくなってしまったり、きちんとした音源がなく正しく後世に伝わらなかつたりする場合があります。そういった校歌の保存活動に携わらせていただいたこともあります。

校歌に限らず、一つの歌を一緒に歌うということには、人と人とを強く結ぶ効果があります。その人たちの間に音楽があるということは、とても素晴らしいことです。

校長や教職員にも、行事や式典などで積極的に校歌を歌ってほしいと思います。子どもたちも、大人が校歌を歌っている姿を見ることで「学校を愛してくれている」と感じるはずです。言葉以上に、その姿勢は子どもたちに思いを伝えることになるのではないのでしょうか。

財津さんは、多くの大人たちが抱えている校歌に対する思いをミュージシャンの立場で代弁してくれています。上手く言い当てたエッセイだと感じたので、少し長いですが引用させていただきました。

最後になりましたが、学芸発表会の当日は、もしかするとインフルエンザによる欠席者が増えているかもしれません。この日を逃すと全校生と保護者を収容できる「アクリエひめじ」での発表ができません。生徒や保護者の皆さんには、よほどのことがない限り実施する方向で準備を進めることをご理解、ご了承願います。無事に令和5年度学芸発表会が成功裏に終わることを心から祈念します。